

■ 書 評



小児の向精神薬治療ガイド—世界の添付文書が示す小児への使い方—

稲田俊也 編
 稲田俊也, 萩倉美奈子,
 遠藤 洋 著
 じほう
 2017年6月 280頁
 本体価格 3,000円+税

本書は、同じ出版社から毎年発行される「治療薬ハンドブック」の2017年版を参考に、原則として2016年11月末時点で薬価収載されている、わが国の日常診療で汎用されている向精神薬を収録し、それぞれの向精神薬について、一般的な薬剤特性を要約し日本人成人における標準的な使い方を明示した後、添付文書にみられる小児投与の際の留意点を、国別（主に日本・米国・英国・オーストラリアなど）に収集・抜粋・翻訳・要約し、紹介したものである。掲載されている向精神薬は網羅的で、抗精神病薬や抗うつ薬、抗てんかん薬、中枢神経刺激薬のみならず抗酒薬や抗認知症薬、脳循環・代謝改善薬まで含む。実際に小児に投与する向精神薬は限られるかもしれないが、参考になる。

児童精神科医療では、成人同様、まずは心理社会的支援を検討し、必要に応じて薬物療法を検討するという基本的な治療姿勢が重要であり、薬物療法を開始する場合、ごく少量投与から開始し、頻回に慎重に効果判定を行い、徐々に用量調整すべきであるが、小児と成人の間には薬物動態学および薬力学的なさまざまな差異がある。発達障害対応など、ますます増加している児童・思春期精神科医療のニーズに応じるためには、今後さらなるエビデンスが蓄積され、最新の情報を一般の精神科医が入手しやすい環境を整備する必要がある。

わが国では、薬剤の治験にあたっては、抗てんかん薬や一部の中枢神経刺激薬・抗精神病薬を除き、しばしば小児は対象から除外されている。保

険診療で使用可能な薬剤の多くで、「小児に対する有効性と安全性は確立していない」などの記載で小児投与に関するエビデンスが少ない事実が添付文書に明示されている。実際はエビデンスが限られているものの医師の裁量で使われている。日本人小児でのエビデンスが限られる現状では、成人あるいは外国人小児の治験データを、有用性を推測するための1つの材料として活用することが考えられる。本書は、実際の薬物投与にあたり、添付文書に投与の留意点や用量の記載がない場合の参考資料、あるいは処方検討の支援ツールとして用いられることを想定してまとめられている。

本書の刊行のきっかけは、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）【長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業】「発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成と普及」研究班（主任研究者：弘前大学、中村和彦教授）に、わが国の臨床精神薬理学の第一人者の一人である編者らが参加したことであり、本書は同研究班の成果物の1つである。ただし、編者を含め本書の著者に児童精神医学の専門家は含まれておらず、そのためか、通常の治療薬ハンドブックなどに記載があるはずの総論的な内容が全くない。おそらく同研究班から近い将来、児童精神科領域における薬物療法に関する総論的なハンドブックが出版され、それと併用することで本書は威力を発揮するであろう。

精神科薬物療法は、成人同様、小児にとっても精神症状を改善させる重要な治療方法の選択肢の1つである。しかし児童・思春期精神科薬物療法をテーマとした翻訳書以外の包括的な書籍で、わが国の実情を踏まえて執筆されたものは、他の治療法と同時に紹介されたもの、あるいは発達障害など特定の疾患を対象にしたものに限られてきた。今後、本書を含め、わが国での児童・思春期精神科薬物療法に関するテキストやガイドブックが増えることで、わが国の児童・思春期精神科医療の全体的なレベルアップにつながる事が期待される。

(高橋秀俊)